



「今年こそ祭り」願い込め

青森ねぶた祭で大型ねぶたの制作を手掛ける、ねぶた師14人がそれぞれ描き下ろした色紙が18日、青森市の廣田神社に奉納された。色紙は、昨年の祭り中止を受け、ねぶた師の経済的支援を目的に行われたクラウドファンディング（CF）の趣旨に賛同した同神社の田川伊吹宮司がCFに申し込み、返礼品として受け取ったもの。厄・災・病をほらい除く同神社に奉納することで、田川宮司は「新型コロナウイルスが収束し、今年こそ祭りが開かれれば」と願う。

CFは昨年、青森公立大学の佐々木てる教授や同大学の学生ら有志がプロジェクトを立ち上げて実施し、約2500万円の支援が集まった。14人による色紙は、30万円の支援を申し込んだ15人限定の返礼品。ねぶた絵が描かれた約12〜13枚四方の色紙14枚を一つの額に表装したものだ。

神事には、佐々木教授や学生らも参加し、玉串をささげ、疾病退散などを祈った。田川宮司は「地域の繁栄を願い、文化を守るのが神社の役割。何かできることはないか考えていた」と意図を説明。そして「新型コロナウイルスが全てを奪ったわけではない。これまでなら体験できないことを経験することができた。しっかりと道を歩んでほしい」と学生らにエールを送った。

同大学3年の櫛引星希（ほし）さんは「ねぶた祭りの魅力を再確認できた。コロナが早く収束して、また祭りがしたい」、佐々木教授は「思っている以上に『心』を頂いた。自分たちがやってきたことが、さまざまなる形となっていることに感無量」と語った。

（安達一将）



【写真右】色紙を奉納した田川宮司（左から3人目）と、クラウドファンディングを実施したプロジェクトチームのメンバーたち【同左】奉納された色紙。ねぶた師14人の感性があふれている